

長崎県地学会 平成元年度総会・研究発表会

研究発表講演要旨

1. 長崎市帆場岳周辺の川平閃緑岩類に捕獲された 安山岩類ならびに火砕岩類の岩体について

田島 俊彦 (有明中)・鴨川 信行・布袋 厚 (上戸町病院)

2. 五島玉石について

竹下 寿 (九州女子短大)

福江島の南端、太田海岸 (富江町) が玉石の産地である。礫の多くは灰黒色に磨かれその品位を示す。供給源は五島層群 (植田, 1961; 宮地, 1988によると20m. y. より古い) の苦鉄質凝灰角礫岩層で、岩石は玄武岩 (比重2.90-2.93) である。供給源の露頭の観察でも、礫を鏡下でも自破砕溶岩である。露頭では、本岩は黒色の部分から白色の部分に移化する。後者は脈状に珪化変質を受けている。黒い光沢のあるこの玉石を、あえて「五島玉石」とよぶことにした。海岸の大部分の礫は灰黒色であるが、暗緑灰色火山砕屑岩も若干みられ、なかに白色の礫も混じる。五島玉石が肉眼的に均質で重みあり、硬質で玉石としての品質を保ちえたのは、1) 斑晶が小さい、2) アクチノライト変質をうけている、3) 潜晶質石英による交代、4) 単斜輝石は新鮮な状態で残るものが多い、などによる。

3. 諫早市西諫早付近の第四系

—特に古貝津層と火山灰の分布—

阪口 和則 (川棚高)・西村 暉希 (県教委)・堀口 承明 (獣興館高)

西諫早付近の第四系、とくに中位段丘礫層である久山砂礫層及びそれと同時異相の関係にあると推定される古貝津湖層及びこれらを広くおおむ火山灰層の分布を中心に地質図にまとめた。

古貝津湖層は薄層理泥岩砂岩の互層をなし、ニレ、カエデ、モチノキなどの植物化石を産出し、上部にはピート層を伴う。

火山灰層は貝津火山灰層と名づけ、露頭観察と、重鉱物組成から上部、下部の二層に分け、上部を大三東ローム層に、下部を八女粘土層に対比した。

さらに、火山灰層を不整合におおむクロスラミナを示す円礫層を西大川礫層と名づけ、パウドルフ間氷期 (GROSS, 1958) の堆積物であると推定した。パウドルフ間氷期は、27,000年BPで、有

明，不知火海域では大江層の時代に相当する（有明海研究グループ）。

ボーリング資料から標高1 m以下に，沖積層である貝殻植物片を多く含む横島泥層の存在がわかった。

4. 対馬三根湾奥部域の沖積層

原 口 強（復建調査設計）・松 岡 數 充（長崎大教養）

特別講演要旨

有明海湾奥部の干拓について

渡 辺 潔（佐賀大学 農学部）

河川や潮流の堆積作用によって自然陸化したり，干拓されて今日の佐賀・白石平野は形成されてきました。標高5.0メートルの等高線は海岸線より約20キロメートルの背後地の山麓であり，昔の海岸線であったと思われます。

干拓工事は鎌倉時代以降であり，戦国時代末期までは技術も低く，簡単な盛土を行う程度であったのが，江戸中期になると石垣を使用するようになり大面積の干拓が行われるようになりました。現在の地名で搦（からみ），籠（こもり）などの名称をもっているところは当時の新田を示しています。明治以降は民営事業を中心として資本投下が行われ，干拓事業が行われましたが，昭和に入り干拓事業は国営，県営として行われるようになり，大規模なものが実施されています。佐賀平野の生い立ちと干拓について説明します。

海外報告要旨

キナバル山の自然

（マレーシア，ボルネオ島・サバ州，標高4,101m）

迎 満 康（佐世保北高）

89'8.11～8.18の期間，教師メンバー5名で登山したときの記録です。

この登山は登頂を目指すと同時に，東南アジアの自然を経験し，自然破壊の現況を知ることが目標にしました。

今回の報告は“高校生に自然破壊をどう考えさせるか”をテーマとします。